

# 九州方言調査報告（第1号）

## －ベネチア学会報告－ 平成29年5月

筑波大学：島田雅晴

東北大学：長野明子

東北大学：三上 傑

### 目次

1. ご挨拶
2. ベネチア学会報告記
3. 発表内容の要約
  3. 1. リサーチ・クエスチョン
  3. 2. 先行研究
  3. 3. 調査結果からの考察
  3. 4. 「よう」と「とう」の進行の解釈の違い
4. 終わりに
5. 研究プロジェクトについてのご説明
6. 発表に使用したポスターの縮小版

## 1. ご挨拶

福岡市シルバー人材センターのみなさまには1月と2月に、北九州市シルバー人材センターのみなさまには2月に、私たちの九州方言調査にご協力いただきました。大変ありがとうございました。この場をお借りしてあらためてお礼申し上げます。調査でわかったことや学会で発表したこと、さらには、これからの予定などを「九州方言調査報告」というリーフレットにして定期的にみなさまにご報告していこうと思っています。今回はその第1回目です。

私たちは1月、2月の調査結果を4月に「レキシコン研究会」という国内の研究会で早速報告いたしました。そこでは、特に、「降っとう」、「降りよう」などに見られる「とう」と「よう」について報告しました。そして、この5月2日・3日にはイタリアのベネチアで開かれた“Workshop on Pseudocoordinations and Multiple Agreement Constructions”という国際会議でポスターによる発表をしてきました。内容は、やはり、「とう」と「よう」に関するものです。「九州方言調査報告（第1号）」では、「ベネチア学会報告」と題しまして、ベネチア旅行記とそこでの発表内容の紹介をしたいと思います。発表に使ったポスターの実際の大きさは横70cm、縦100cmですが、それを縮小したものを本リーフレットの最後のページにつけておきますので、ご笑覧ください。福岡方言がアルファベットになって図の中に入ったりしています。

また、巻末には、方言調査のプロジェクト自体についての説明を掲載しました。我々3名がそもそもどのような研究者なのか、調査がいったい何を指しているのか、簡単にまとめています。どうぞご参考になさってください。

## 2. ベネチア学会報告記

今回は島田がひとりで行って来ました。イタリアには何回か行ったことがあるのですが、ベネチア（ベニスともいいます）は初めてでした。イタリア政府観光局のホームページから地図を拝借しますと、場所は赤丸がついているところです。



小さくてわかりにくいですが、ベネチアは 100 いくつもの島からできている都市です。空港からベネチアの入り口までは自動車で行けますが、まちの中には自動車は走っていません。歩きか船で移動します。この都市自体が世界遺産だそうです。

学会開催時はちょうど日本ではゴールデンウィークの真ただ中で、航空券もようやくとれたという状態でした。トルコのイスタンブールを経由してベネチアにはいり、ベネチアの空港からは船で行きました。いくつもの島々が橋でつながっているベネチアの交通手段は歩きか船です。船がバスのようにたくさんの停留所を持っていて往来しています。私が泊まるホテルは便のいいところで、船着き場のすぐ近くでした。下の 2 枚の写真は空港からベネチアにはいる船の上から写した街の写真です。水辺ぎりぎりに石造りの建物が建ち並ぶ光景には異国情緒を感じました。



次の 2 枚は、船から降りてホテルに行く道すがら写したものです。



海外で学会に参加するときにはいつもそうなのですが、ホテルについたら、まず、学会会場までの道順を確認します。今回の会場はカフオスカリ大学（*Università Ca' Foscari Venezia*）というところです。カフオスカリというのがそもそも文化遺産の建物だそうで、そこを大学として使い、大学名にもなっているようです。文化遺産をそのまま日々の暮らしの中に入れ、しかも、大学として使っているのです。実はこれはヨーロッパではそれほど珍しいことではないようです。これまでも史跡（のような大学）が会場となっている学会に参加したことがあります。そのカフオスカリにいてみようと思い、ホテルの人から地図で教えてもらって、それをたどってみました。このような景色の中を歩いていきます。



運河のそばを通り、橋を渡り、細い迷路のような路地が続きます。お店もたくさんあります。迷いながらも 10 分くらい行くと次のような眺めになりました。



わかりにくいので少し写真を大きめにしましたが、奥に橋が見えるのがわかるでしょうか。一段高い所に人が写っていますが、その橋の手前右に大学に入る門があり、その中を見ると次のような建物があります。



↑これがカフオスカリ大学です。やはり、ここも水辺にたっていて、向こう側の大運河から眺めると次のような感じです。



大学の中から運河を眺めるとそれが素晴らしく、われながらよく撮れた 1 枚です。



肝心の学会風景もお見せします。↓次の 2 枚は左側が開会式直前、右側が休み時間です。



少なそうですが、イタリアをはじめとするヨーロッパ各国、アメリカ、それから、私がいますので日本、と多くの国々から参加者がいました。この中で私も前に立って、スライドを使って福岡方言のデータを用いて、研究発表をしてきました。みなさんと調査をした結果、このような機会に恵まれました。

さて、イタリアで忘れてならないのはおいしい食べ物でしょう。ベネチアは福岡、北九州と同じく、海産物に恵まれています。野菜もおいしいです。うっかりしたこと、食べるのに夢中になり、レストランで写真を撮り忘れたことも多く、お魚料理をご紹介することができませんが、そのかわりにパスタを2点どうぞ。パスタはその形状により名前がついているようです。左が幅広のパッパルデーレというパスタ、右が貝殻の形をしたオレキエッテというパスタです。どちらのお料理もお野菜とのコラボでとてもおいしかったです。



次の写真は、朝食の一部です。



見ていただきたいのは、左側のお皿にある1枚のクッキーです。チョコの生地と白地の生地からできているクッキーがあるのをご存知でしょうか。私が見たところ、ベネチアの得意技はこのクッキー類です。とても小麦粉の重量感があって、甘くておいしいです。街のパン屋さんやスイーツ屋さんに行くと色も形もいろいろなクッキーが売られていました。ジャムがのっけていておいしそうなものも多くありました。これは2週間くらい持つ、とお店の人が

いっていただけだったので家族に買ってきました。ベネチアの雰囲気伝えることができた、いいおみやげになりました。

おみやげといえば、ガラス細工で有名なベネチアにいきましたので、グラスも買ってきました。ベネチアの中でも**ムラーノ島**という、少し離れた島がガラスづくりでとても有名なようです。そこで作られたものも含め、グラスをいくつか購入しました。最初は買うつもりはなかったのですが、あるレストランに入ったところ、ミネラルウォーターをベネチアングラスでお給仕してくれまして、それがとても雰囲気がよかったです（前頁のパッパルデーレの写真の中で、右上に一部写っている青いグラスがそれです）。クッキーとガラス細工はおすすめのおみやげです。それから、ベネチアには美術館や博物館が多くあります。また、毎夜クラシック音楽の演奏会が教会などで開かれています。このようなところにもいってみれば思い出話になると思います。

最後に名残の1枚です。帰る日の朝、ホテル近くの**アカデミア橋**から見た風景です。



帰りは行きの航程をそのまま逆にして、5月5日の夕方にベネチアとの時差+7時間の日本につきました。ベネチアからイスタンブールまで2時間半、イスタンブールから東京まで約12時間かかります。このようにして、みなさんと調べたデータとともに世界遺産の都市へ行ってまいりました。

### 3. 発表内容要約

#### 3. 1. リサーチ・クエスチョン

さて、肝心の学会発表の中身についてです。タイトルは次のようにしました。

“Three Functional Positions for Aspects: Evidence from Kyushu Japanese”

日本語になおすと、「相のための 3 つの機能範疇位置—九州方言からの証拠—」とでもなるでしょうか。「相(そう)」とは進行や完了の意味のことです。

東京方言（つまり標準語）では「～ている」という表現で、進行も完了も表します。例えば、次の文は進行の解釈と完了の解釈であいまいです。

(1) 太郎が論文を書いている。

進行の解釈は、「今現在書いていて、まだ書き終わっていない」、完了の解釈は、「すでに書いていて、論文は出来あがっている」、というものです。次のように語句を補うと違いがよくわかります。

- (2) a. 太郎が今まさに論文を書いている。 (進行)  
b. 太郎がすでに論文を書いている。 (完了)

東京方言では「～ている」で進行も完了も表すのですが、西日本の方言では進行の時と完了の時で別の語を使うことが多いようです。例えば、博多方言では、次のように、進行では「よう」、完了では「とう」を使いますね。

- (3) a. 太郎が論文ば書きよう。 (進行)  
b. 太郎が論文ば書いとう。 (完了)

みなさんと調査してわかったことは、「よう」は進行、「とう」は完了、と完全に割り切れるほど単純ではないということです。「よう」は一律進行を表しますが、「とう」は、場合によっては、完了に加えて進行を表すこともある、ということでした。例えば、(3b) の例文は、完了はもちろん、進行の意味にもなる、と判断される方が少なからずいるのです。いったいこれはどういうことなのでしょう。

この理由を考えることは、実は、現代言語学の中核の一部に触れることになります。立派な「リサーチ・クエスチョン（調査・研究を要する問い）」になります。今回の方言調査から得られた課題の一つです。ベネチアの発表ではこのテーマに取り組みました。

### 3. 2. 先行研究

「とう」のあいまい性（「完了」と「進行」の2つの意味を表すこと）については、実際のところ、すでに文献で指摘され、解決案も出されています。しかし、おもしろいことに、そこでのデータは、みなさんからいただいたデータとは文法性の判断が食い違っているところがあるのです。とすると、先行研究で出された解決案には当然ながら疑問がでてくるわけです。

その先行研究とは、北九州市立大学の漆原朗子（うるしばら・さえこ）先生が2003年に発表された“On the form and meaning of aspectual markers”という論文です。漆原先生によれば、「とう」が完了ではなく進行の解釈になるような場合は限られる、ということです。もう一度、(3b) の文について考えてみましょう。

文とは通常、主語と述部に分かれます。この文では、主語は「太郎が」、述部は「論文ば書いとう」です。述部の「論文を書く」という表現は、論文を書くという「行為」と書き終わるといふその行為の「終点」をあらわします。このように行為と終点を表す述部に「とう」が生起すると、「とう」は進行も表しうる、というのが漆原先生のお考えです。

述部にはほかにも種類があります。「行為」しか表さないものもあります。例えば、次の東京方言の文をご覧ください。

(4) 太郎が走った。

「走る」という述部は行為だけで、終点は表していません。走るという行為がどうなれば終わるのか、何も語っていません。逆に、「終点」しか表さない述部もあります。

- (5) a. 電車が到着した。  
b. 金魚が死んだ。

「到着する」、「死ぬ」という述部は、出来事の終わりしか表していません。それに至る過程、行為は示されていないのです。漆原論文では、「とう」は行為だけを表す述部や終点だけを表す述部に付いても進行の解釈にはならない、と観察されています。つまり、下の(6a)の例文にあるように、「走る」に「とう」が付くと非文法的になり、(6b)のように「死ぬ」に「とう」が付くと完了の解釈にしかならないという判断がなされているのです。文頭の「\*」のマークは、その文が「非文法的」であるという判断を表します。

- (6) a. \*太郎が走っとう。 (漆原論文における判断)  
b. 金魚が死んどう。

仮に、「よう」が用いられると、「走る」は進行の解釈、「死ぬ」は進行の解釈の一種とされる近接未来(「今にも～しそうである」、という意味)の解釈になります。

- (7) a. 太郎が走りよう。 (進行)  
b. 金魚が死によう。 (近接未来)

しかし、これらの意味は、「とう」では出てこないということです。このように、漆原論文では、「とう」が進行の解釈になるのは行為と終点のどちらも表す「論文を書く」などの述部でしか見られない、とされています。

### 3. 3. 調査結果からの考察

しかし、みなさんの文法性の判断はいかがでしたでしょうか。今回の調査では、何人かの方に(6a) や(6b)、そして、それに類する文をお聞きしました。おもしろいことに、(6b) の例文については漆原論文と同じく完了の解釈しかない判断するのに対して、(6a) の例文についてはみなさん進行の解釈があると判断されました。つまり、これが意味するのは、

行為しか表さない述部でも「とう」が進行を表すことがある

ということです。実際のところ、漆原先生も(6a) の文をよしとする話者がいることを報告しています。「走る」はそれだけでは行為しか表しませんが、「3周」という表現を付け加えて「3周走る」とすると、終わりがある行為になります。つまり、3周走り切ればその行為は終了します。「論文を書く」が論文を書き終わればその行為が終わるというのと同じです。漆原論文では、(6a) の文をよしと判断する人は、「3周」というような表現を読み込みこんでいるのだと考えます。次のように、いわば、見えない「3周」があると考えます。

(8) 太郎が(3周)走っとう。

したがって、あくまで漆原先生の定式化では、「とう」が進行を表すのは行為と終点を表す述部に付くときのみとなり、それはそれで大変美しい定式化なのです。

この点に関して、今回の調査では大変重要なデータが得られました。今回のベネチアの発表はそれがあったからできたといっても過言ではありません。それは、次の2つの文に関する違いです。

- (9) a. 太郎が走っとう。  
b. 太郎が3周走っとう。

どちらも再掲のデータです。何人かの方にお聞きしたところ、みなさん(9a)については進行の解釈があるということで一致するのですが、(9b)につい

ては判断が一致しないのです。つまり、人によってはどちらも進行形に読め、人によっては、(9a) のほうしか進行形に読めない、ということがわかりました。漆原先生がお考えのように、(9a) にも「3周」が目に見えない形で隠れているとしたら、どちらも同じように進行形として解釈され、(9a) と(9b) で判断に違いが生じることはないはずなのです。しかし、実際には違いがあると判断する方が相当数いらっしゃいます。これが意味するのは、

(9a) の進行の解釈と(9b) の進行の解釈は仕組みが異なる、

ということです。やはり、「走る」は行為しかあらわすことができず、行為しか表さない述部は、行為と終点の両方を表す述部とは異なる仕組みで進行形の解釈を可能にしているといえるのではないのでしょうか。

そして、(9a) を進行の解釈にする仕組みと、(9b) を進行の解釈にする仕組みのどちらも使う人もいれば、後者の仕組みは使わないという人もいるということなのです。どちらの判断が正しくて、どちらが間違っているということではありません。使う仕組みの組み合わせが人により若干異なるということであって、これはありうることなのです。2つの仕組みに関する詳しい分析は今後論文にしていこうと思っています。

### 3. 4. 「よう」と「とう」の進行の解釈の違い

もう一つ、「とう」の進行解釈について、今回の調査でわかったことをご紹介します。それは、「とう」も「よう」も進行を表すといっても、微妙に使用する環境が異なる、ということです。次の文をご覧ください。

- (10) a. あんた、なんか食べよう？  
b. あんた、なんか食べとろう？

どちらも進行の解釈になりますが、口をもぐもぐしている相手にいう場合は「よう」、そうでない相手にいう場合は「とう」を使うというご指摘をいただきました。次のペアも異なる環境で使われることがあるようです。

- (11) a. 太郎がはしっとうばい。(はしっとうよ。)  
b. 太郎がはしりようばい。(はしりようよ。)

「とう」は遠くで走っている姿が見えるという感じがするが、「よう」はすぐそこで走っている感じがする、という判断をしてくださった方がいらっしゃいました。

また、進行の「とう」は天気を話題とする場面で使われることがあるということもご指摘いただきました。特に、電話口で相手にこちらの天気について教えたり、相手側の天気について尋ねたりする場合に使うことが多いようです。

- (12) 友人：そっち、あめふっとう？ (電話の相手に天気を尋ねる。)  
自分：うん、ふっとうよ。 (こちらの天気を答える。)

さらに、次の例では、「とう」は使えないというご指摘もいただきました。

- (13) あー今日も雨バイ。ようふりようばい。

同じ進行でも両者の使用環境が異なるという観察は大変示唆的です。そして、「よう」の進行解釈と「とう」の進行解釈はどのように異なるのかという問いが生じます。

この答えについてはまだ調査中なのですが、「直接知覚」、「間接知覚」というような考えに基づいて仮説を立てることは可能です。例えば、(10)の文を考えてみましょう。(10a)の文と(10b)の文のどちらも、話者が相手が何かを食べていると推測、判断して発話している文です。「よう」は口を動かしているという直接知覚できる証拠に基づいて判断している場合に使うのに対し、「とう」はそのような直接的な証拠がない場合に使われています。「とう」の間接性は、(12)の文の電話口で天気について会話している状況でも見てとれます。自分自身ではその天気を直接知覚できない場合に「とう」を使っています。

(11a)の例文も同じように説明できます。遠くで走っている人に対して判断をする場合は直接的な視覚情報だけでは足りず、それ以外の記憶などに頼

った判断材料も必要になることがあるのでしょうか。おそらく、そのような場合に「とう」を使うのだと考えられます。一方、目の前を走っている人は見るだけですぐそれとわかりますから、直接知覚の情報だけで事足りるのでしょう。そういう場合には「よう」が選ばれるということではないのでしょうか。

目の前のことには「よう」の方が相性がいいということは、(13)の例文でもわかります。(13)のように雨が降っているのを目の当たりにして思わず感想を述べてしまったという状況では、「とう」ではなく、「よう」が選ばれます。

世界の言語を見渡すと、自分が得た情報の出どころを示すための文法マーカ（日本語で言えば助詞のようなもの）をもつ言語は意外と多いのです。「情報の出どころ」には「証拠性(Evidentiality)」という専門用語が当てられることがあり、もしかしたら、博多方言の「とう」は証拠性を示す文法マーカなのかもしれません。間接的な証拠に基づいて得た情報を述べる場合に「とう」が使われるという仮説を立てることができそうです。今後の調査でみなさんに詳しくお聞きしたいと思っています。

#### 4. おわりに

昨年度の2月には福岡のテレビ局6局で調査の様子が放映され、同僚の教員も学生も大変喜んでくれました。また、ふと学生から、「先生、テレビ見ました」といわれることもありました。みなさんと楽しく、しかも、学術的にも価値のある取り組みができたことに心から感謝しています。このリーフレットを積み重ね、みなさんとのコラボという形で方言の本を出したい、とひそかに考えているところです。

平成29年度も九州方言の調査にうかがいます。近々シルバー人材センターを通じて、日程の調整等をしたいと考えています。その際にはどうぞよろしく願いいたします。また、近隣の方で興味をお持ちになりそうな方がいらっしゃいましたら、ぜひお声掛けしていただければと思います。またお会いできるのを楽しみにしております。

## 5. 研究プロジェクトについてのご説明

### ● 調査の概要

調査は、筑波大学と東北大学に所属する言語学研究者がチームを組み、現代言語学の知見を背景にして、九州の方言、特に福岡県の方言の実態を調べるものです。本調査は、下記の日本学術振興会の科学研究費のプロジェクトの一部として行っています。

---

基盤研究（B）（一般）「Mirativityにおける「焦点」と「評価」の役割：  
日英語からのアプローチ」

課題番号：16H03428

期間 平成28・29・30・31年度

チームメンバー

研究代表者：島田 雅晴（筑波大学 人文社会系 准教授）

研究分担者：長野 明子（東北大学 情報科学研究科 准教授）

研究分担者：三上 傑（東北大学 高度教養教育・学生支援機構 専任講師）

データベース

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-16H03428/>

---

### ● 調査の背景

調査チームメンバーは、言語学、そのなかでも特に「英語学」の専門家です。現代の英語学は、英語というひとつの言語だけを見るのではなく、世界の様々な言語との比較の中で英語という言語の本質を捉えようとしています。日本での英語学研究の場合、日本語と英語の比較が重要なテーマになります。従来は『標準日本語』が英語との比較の主役だったのですが、我々の独自性は、標準日本語ではなく、方言、その中でも根強い力をもつ福岡の方言との比較を行うところにあります。また、「世界の言語のなかの福岡方言」という視点で研究を行っていますので、伝統的な国語学、日本語学で行われてきた方言研究とも毛色が違うと思います。

● 調査の目的

1. 方言の研究を通して、「普遍文法」研究の進展に寄与する。

福岡県を中心とする九州の方言を、英語をはじめとする世界の諸言語と比較し、ヒト一般のもつ言語能力の普遍性とその可塑性に迫ること、それが、言語研究者としての我々の大きな目的です。

2. 方言の文法的側面を正確に記述し、後世に伝える。

ヒトの言語には、辞書の見出し語となるような内容語 (content words) と、内容語同士を結び付けて文を作っていく文法語 (grammatical words) があります。福岡の有名な内容語には、「ごりょんさん」「にくじゅう」「いぼる」などあり、一方、文法語としては、

「ここは呉服町ですバイ」

「ここは呉服町ですタイ」

におけるバイとタイ、

「雨がふりようよ」

「雨がふっとうよ」

におけるヨウとトウ、などがあります。(ヨウとトウは、地域によっては、ヨルとトルとなります。)

我々は、特に文法語に注目しています。なぜなら、文法語は、内容語より普遍性が高いからです。形はちがえど実質的には同じ役割をする文法語を、英語をはじめ世界の様々な言語のなかに共通して見出すことができます。そのようなものを根気強く集め、分析し、ヒトの言葉の普遍性の素(もと)である『普遍文法』の姿を明らかにしたい。そういう思いで3名が結びついています。また、文法語について調査・記述し、理論的分析を行うには、言語学(特に、形態論や統語論といわれる分野)の訓練が不可欠です。英語学研究で培った言語分析の技術を、福岡方言の文法語の分析に応用することができます。

### 3. シルバーの方々とともに、生きた言語学を行う。

平成28年度は博多区と小倉区で調査を行いました。シルバー人材センターとの共同作業は我々の当初の予想を超えて有意義なものであり、目からウロコという体験の連続です。(1)(2)はアカデミアの中での言語学といってもいいかもしれませんが、シルバー会員の方々から教えていただくことはその枠にとどまりません。福岡の方言は、それを使う方々の愛着の深さという点できわめて独自だとわかりました。ことばの活力は福岡・北九州というコミュニティの歴史と活力を反映したものであるとあっていいでしょう。シルバー人材センターとの共同から得た第3の目標として、(1)(2)のように方言を世界のなかに置くと同時に、福岡県の地域性、歴史性のなかに置いて考えてみたいと思っています。

次のような「ことばのアート」に注目しています。

- \* 「はかたにわか」(西日本新聞に掲載されるものやJA広報誌に掲載されるものを収集中。タイやバイがたくさん出てきます)
- \* 漫画『博多っ子純情』や漫画『ペコロスの母に会いに行く』(長崎のことばも、肥筑方言として福岡の方言と同じ区画に入ります。)

#### ● 今後の予定

今回の学会発表で中心的にとりあげたのは、「トウ」「ヨウ」という相<sup>そう</sup>の現象(動作の開始と終了を表す現象)でした。これと比較して面白いのが、

「郵便局に行きださん」

「郵便局やら、行ききらん」

の「出す」と「切る」です。東京方言の

「太郎は走りだした」

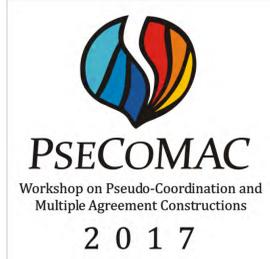
「太郎はコースを走りきった」

では、「出す」「切る」は相の表現として使われています。しかし、郵便局の文では、可能表現として使われているのです。これはなぜでしょうか？ことばは我々を魅了してやみません。

# Three Functional Positions for Aspects: Evidence from Kyushu Japanese<sup>1</sup>

Masaharu Shimada (U. of Tsukuba)  
shimada.masaharu.fu@u.tsukuba.ac.jp

Akiko Nagano (Tohoku University)  
nagano@ling.human.is.tohoku.ac.jp



May 2 & 3, 2017  
Ca' Foscari University of Venice

## 1. Introduction

➤ *V-te-iru* 'V-te-be' forms in Japanese

≡ Pseudocoordinations

(1) *John-ga ronbun-o kai-te iru*

John-NOM article-ACC write-te exist

(i) 'John is writing a paper' (Prog.)

(ii) 'John has completed a paper.' (Perf.)

➤ Kyushu Japanese counterparts

(2) *John-ga ronbun-ba kaki-yoo* → (i)

John-NOM article-ACC write-yoo

(3) *John-ga ronbun-ba kai-too* → (ii)

John-NOM article-ACC write-too

*Yoo* → progressive markers

*Too* → perfective markers

## 2. Urushibara's (2003) analysis

(4) (cf. Urushibara (2003: 785))

➤ Urushibara's observations supporting (4)

(5) *John-ga hasiri-yoo/\*hasit-too* (Activity)

John-NOM run-yoo/run-too

'John is running./\*John has finished running'

(6) *John-ga ringo-ba tabe-too* (Accomplishment)

John-NOM apple-ACC eat-too

(i) 'John ate a whole apple.' (Perf.)

(ii) '(\*) John is eating an apple.' (Prog.)

→ *Too* moves to an F-init position.

## 3. Problems

➤ Crucial data from our informants

(7) *John-ga hasit-too* (Activity)

John-NOM run-too

'John has finished running.' (Perf.)

'John is running.' (Prog.)

→ All of the 7 informants find (7) ambiguous.

Urushibara (2003) posited zero delimiters.

(8) *John-ga sanshuu hasit-too*

John-NOM three tracks run-too

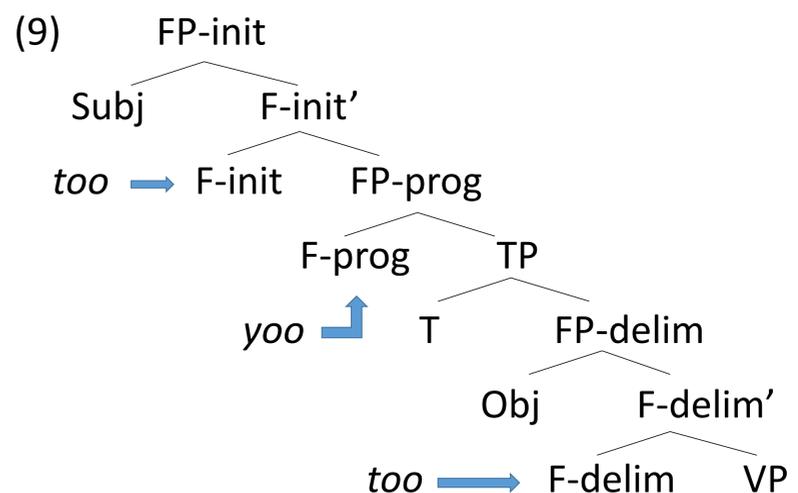
'John has completed three laps.' (Perf.) (7 speakers)

'John is completing three laps.' (Prog.) (2 speakers)

(Note also that 3 of the 7 informants accepted (6 ii).)

➤ The progressive interpretations with *too* and with *yoo* are different in nature.

## 4. A proposal



➤ When *too* occurs as F-init, it can pragmatically yield an interpretation quite similar to a progressive one.

## 5. A further issue: Evidentiality

(10) *anta, nanka tabe-{yo/to}-roo?*

you something eat-yoo/\*too-will

'You are eating something, aren't you?'

(direct observation)

Selected References: Urushibara, Saeko (2003) "On the form and meaning of aspectual markers," In *Empirical and theoretical investigations into language*, ed. by S. Chiba, 778-792, Tokyo: Kaitakusha.

<sup>1</sup>This study is financially supported by KAKEN 16H03428.